### 研究資料

# フランス・ブルターニュ地域圏におけるESD・環境教育(2) — 行政と総合図書館、博物館による取り組み —

# 遠藤 晃

南九州大学 人間発達学部 〒880-0035 宮崎県都城市立野町3764-1

Environmental education in Brittany, France (II)
—Mairie de Saint-Nolff, Médiathèque de Malestloa and Maison de la chauve-souris—

### Akira Endo

Faculty of Human Development, Minami Kyushu University 3764-1 Tateno. Miyakonojo, Miyazaki 885-0035

ESD (Education for Sustainable Development) is one of important study programs to cultivate solid academic capabilities, in school education. The purpose of this study is to obtain clearly what factors are driving ESD forward. In September 2013, I made a field study on the town office to gather information about the ESD program, the public library and the museum, in Brittany, France. In the results, these institutions provided programs that realize the basic philosophy of ESD, without regard to ESD. It was found that every institution have numerous meetings with collaborators, such as teachers, residents, researchers, etc., to promote the program through dialogue and consultation.

Key words:ESD, Bretagne, France, dialogue and consultation

#### 緒言

ブルターニュ地域圏はフランス北西部に位置し、複雑な海岸線に囲まれた自然豊かな地域で、北部のアルモリック地方自然公園(Parc naturel régional d'Armorique)や西部のイロワーズ海洋自然公園(Parc naturel marin d'Iroise)、そして南東部のモルビアン湾地方自然公園(Parc naturel marin d'Iroise)、そして南東部のモルビアン湾地方自然公園(Parc naturel régional du Golfe du Morbihan)と、多様な自然生態系と生物多様性を保全するエリアを有している。また、イロワーズ海域は1988年に、ユネスコが人間と自然の共生をテーマとしたRéserve de Biosphère (生物圏保存地域、ユネスコエコパーク)に認定し、ESD(持続可能な開発のための教育)の視点をもった環境教育にも積極的に取り組んでいる。さらに、南東部の町Saint-Nolff(サン・ノルフ)には、ブルターニュには数少ないEcole associée à l'UNESCO(ユネスコスクール)に認定された小学校があり、この学校では

ESDの取り組みが進んでいる(遠藤, 2019).

ESDは、環境・貧困・人権・平和・開発などの様々な課題が複雑に絡み合った地球環境問題を解決へ向かわせ、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習及び活動であり、多様な文化や歴史、価値観を持ったステークホルダーを抱合し、課題解決につながる価値観や行動を生み出すために、知識や問題意識だけでなく、論理的思考力、コミュニケーション力、表現力、調整力など、汎用性のある様々なスキルを総合的に向上させるための教育ともいえる。

1992年の地球サミット(リオ・デ・ジャネイロ)以降, ESDの重要性と役割が再確認され,世界中でその取り組みが進んだ。日本政府の主導によって国連で決議された2005年~2014年の「国連ESDの10年(DESD)」によって世界中でESDの推進が加速し、日本でも多くの取り組みがなされた。この間文科省はユネスコスクールを戦略的なESD推進拠点と位置付けてその数を増やし、その結果2006年の20校から2014年8月現在で世界最多となる705校に増加し、この数の増加がDESDの

<sup>\*</sup>連絡著者: E-mail:aendo@nankyudai.ac.jp

成果として報告されている(「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議,2014). その後もユネスコスクールは数を増やし続けて,2018年10月時点で1,116校に達した. その一方で、単にESDの内容を扱っているだけで、学び方及び教え方の意識改革まで至っていないユネスコスクールも多いという指摘もあり(手島,2018),近年、国内のユネスコスクール認定のプロセスに、専門家の指導のもとにESDに1年間取り組む「チャレンジ期間」が設けられたことからも、このままでは日本におけるESDが教育手法などの中身が吟味されないまま、表面上の対応に終始してしまうことが危惧される.

環境教育には、1992年よりもはるか以前からESDの 理念は抱合されていた。しかし、その言葉のイメージ から、環境教育は環境問題だけを扱うものとして矮小 化して捉えられ、理念や哲学が吟味されることなく、 表面的なESDに抱合されてしまったような感じも受け る. 社会で生きるために、汎用性のある力を育成する ESDの理念は、今回の新・学習指導要領の中に流れ込 み、学校教育のなかに取り入れられたことで、所謂、 21世紀型学力の向上に繋がることが期待されている (中央教育審議会, 2016). その一方で, 教育現場でも ESDが掲げる理念や哲学の深い理解が行われないまま に、表面的な、ESD的な内容の羅列に留まれば、意図 している汎用的学力の育成につながらない可能性は十 分に考えられる. そこで本研究は、日本の学校教育に おけるESD的な学びの実現のための手法を確立するこ とを大きな目的とし、本論では、フランスのESDを担 う各種組織・機関で、実際に現場で実践している方た ちについて、ESDの捉え方、ESDの手法、学校教育と の連携などの情報を収集して明らかにし、基礎的な研 究資料とする. ブルターニュ地方の地域性と調査地と して選択した経緯については遠藤(2017)を参照された

### 調査地および調査方法

調査は、2013年9月初旬にフランス北西部のブ ルターニュ地域圏を訪問し、モルビアン県南東部 の小さなコミューン(フランスの最小行政単位)の Saint-Nolff(サン・ノルフ)にあるMairie(役場)と東 部Malestroit(マレトロア)市の総合文化センター内の Médiathèque (メディアテック:メディアセンター・聴 覚ライブラリー). そして西部の小さなコミューン Kernascleden (ケルナスクレダン) の博物館 Maison de la Chauve-souris(メゾン・ド・ショブスリー:コウモリ 博物館)に於いて、ESD環境教育の取り組みと姿勢、 子ども向けや学校との連携プログラムなどについて. インタビュー調査を行った.インタビュー項目は主に、 ①ESDに対する意識・考え方、②ESD環境教育の実施 体制, ③内容と進め方, ④学校との連携, についてで あった. インタビューはすべてICレコーダーで記録し て文字に起こしたのち、その内容から学校教育におけ るESD環境教育を推進する際の、「ESDの捉え方、進 め方, 外部機関(地域の行政, 図書館, 博物館)の関 わり方」について重要な要素を抽出し明らかにした.研究資料という観点から、インタビュー内容をできる限り忠実に再現し、修正は、言い回しや語順など最小限に留めた。なお、各団体とのコーディネート及び移動、仏語通訳はシャルバーグ八千代氏に依頼した.

# 結果

# 1 Mairie de Saint-Nolff (サン・ノルフ役場)

Place Pedrajas-de-San-Esteban 56250 SAINT NOLFF

Saint-Nolff(サン・ノルフ)はフランス・ブルターニュ地域圏のヴァンヌ (Vannes)近郊に位置し(図1),面積  $25 \mathrm{km}^2$ ,人口4000人弱の小さなコミューンである.町内にある 3 つの幼小学校のなかで,ルシアン・ペイ幼小学校(École publique LUCIEN PAYE)はユネスコスクール(Ecole associée à l'UNESCO)に認定されているため,ESDの推進拠点となるユネスコスクール及び学校と行政との関わりをみるために最適な地域と判断し,調査地に選定した.

2013年9月6日にMairie de Saint-Nolff(図2)を訪問し、午前中はAnne-Laere Caudal氏とGwenaëlle Cuedon氏(図3)へのインタビューを1時間ほど行った、午後は、Marie-Lawrence Le Ray氏の引率で、役場が企画

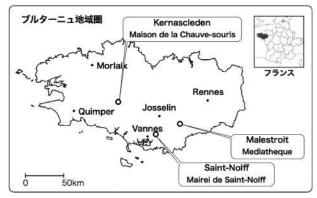


図1. 調査地(フランス・ブルターニュ地域圏)



図2. サンノルフの役場



図3. Anne-Laere Caudal氏(左)と Gwenaëlle Cuedon氏(右)

したプログラムに市民と一緒に参加し、環境に配慮した地域企業ECODIS社を視察した.

Anne-Laere Caudal氏は役場の環境担当で、行政が実施するプログラム作成など、アジェンダ21のプランナー兼総合責任者、Gwenaëlle Cuedon氏はアジェンダ21のサポートと広報・周知を業務としている。Marie-Lawrence Le Ray氏は経済担当である。インタビューの内容は下記のとおりである。ESD環境教育の重要な要素となる部分には著者が下線を付けて示す。

### 1) サンノルフが2009年にブルターニュで最初に制 定したアジェンダ21 local について

アジェンダ21とは、そもそもは「行動する」ということを意味し、その目的の第一の柱は、「自然や環境を守る、良くしていく」ことです、次に、「地域の経済活動を活性化させる」ことが第二の柱です。これは、単に工場や企業を誘致するということではなく、地域の人たちで協力して、地域の生産物をうまく流通させるとか農産物の地産地消などによって、地域経済の活性化を実現していくということです。そして第三の柱が「地域の社会活動を進める、深める」ということです。たとえば老人や失職した人など、大変な状況にある人に仕事を与えて、人と人とのつながりをもっと強め、関係を深める、などです。

アジェンダ21には必ずこの三つの柱が含まれます.たとえば、地域の自然を保全するためにプログラムを作るとします。そのとき、自然保護だけでなく、経済活動の活性化や仕事のない人がその場所を整備することによって収入を得るなど、全体が繋がり、輪になるようにします。つまり、三つの柱のバランスが取れ、重なる部分ができるようにプログラムを考えているのです。例えば、今年7月のプログラムはビオ・ユニヴェルシテといって、夏休み中の子どもたちを対象に考えたもので、コウモリの観察や自然観察など地域のエコロジー(自然・環境保護活動)を主にやりました。9月のプログラムはエコノミー(経済活動)に特化したもので、今日の午後はエコディスという会社を訪問し見学します。そして3本目の柱、ソサイエティ(社会活動)については、これをアクティビティにするのは

<u>難しいのですが</u>, 浄水場を訪問してこのコミューンの 水道について考える, ということだけはすでに決まっ ています.

2009年に本格的な取り組みが始まる前から、市は同様のことをやっていましたが、それほど多くはできませんでした。しかし、アジェンダ21を始めてから、アクションを起こしやすくなり、この三つを並行して実行できるようになりました。一つ一つはそれ以前にも考えられ実施されていたのですが、これらを全て同じレヴェルで行うので、プログラムを考える方もやりやすくなりました。また、周知する際にも、アジェンダ21のプログラムだと言うと住民にわかりやすいということが言えます。アジェンダ21の理念がはっきりしていれば、その理念に沿ったプログラムということですから、さらに説明する必要がないわけです。ですからアジェンダ21を制定することで、仕事がやりやすくなりました。

ESDの10年が始まった2005年当時は始めたばかり で、少しのプログラムしかありませんでしたが、そ こから発展していきました. また, 政治とも関係し, 2008年の地方議会選挙では、アジェンダ21のプログラ ムを実行すると公約に掲げた人を市民が選びました. そのため、2008年から活動が本格的に始まり、2012年 にはプログラムの取捨選択を行い、現在に至っていま す. これらのプログラムは私たち行政が作るものだけ でなく、市民からの要望や意見も取り入れ、市民と相 談したり選んだりしながら組み立てるものもありま す. ですから、アジェンダ21のプログラムは行政だけ が取り組むものでなく、私たちの周りには市民の協力 者がいるのです. また, アジェンダ21は自分たちのコ ミューンのことだけを考えるのではなく、グローバル な「地球」という視点で行います. そして, 私たちだ けでなく地球全体で取り組んでいることなのです.

# 2)子ども向けプログラムや学校と関わるプログラムについて

夏休みや他の休み中の子どもを預かるサントル・ロワジールでは、子ども達が鳥の巣箱を作ってかける活動をしました。これは、子ども達だけの活動なので親たちは内容を知りません。そこで、7月に、子ども達が巣箱をどんな風に作り設置したのかを知り、設置した場所を探すような、大人向けの活動を企画しました。その時は夏休み中だったので、子どもたちも親と一緒に来て参加しました。ですから、「子ども」だけのアクティヴィティは特に設定していないし、考えていません。

役場が中心に運営していて連携しやすいこともあり、このようなサントル・ロワジールでのプログラムが中心ですが、学校との連携にも少しずつ取り組んでいます。以前、学校と一緒に、除草剤がどれくらい良くないことかを知るために、薬品を使わない除草の方法を試し、その後、それを題材にしたデッサンのコンクールと研究発表をするアクティビティを行いました。他にも、学校の食堂の残飯をコンポストで肥料にして、畑の肥料として再利用する活動もしました。学校との活動を増やすことは、これからの課題ですね。

### 3)世界中で取り組んでいるESDについて

たぶん、フランスでいうEEDD(Education a L'Environnement et au Developpement Durabel)のことですね。それ自体については<u>あまりよくわかりません</u>が、<u>ESDをするというのでなく</u>、そういうふうにしているつもりです.

アジェンダ21では、ESDの考え方に基づいて、先ほどの3つの柱があり、プログラムがあると言えます、アジェンダ21というとき、人々がすぐに思い浮かべるのは自然とか自然保護のことです。でも実際には、経済活動や社会活動(人とのつながり)も同時に関わってくるわけで、必ずしも自然保護だけではありません。

### 4) 哺乳類グループなど、外部の組織・機関との連携 については

Le Groupe Mammalogique Breton (GMB) は、この地域の哺乳類研究のアソシエーションですが、たとえばコウモリやカワウソをテーマとするときには、GMBから専門家が来て詳しく楽しく説明をしてくれるといった協力体制があります。また、野鳥保護の全国組織LPO(Lger de Protection de Oisaux)とも同様の協力体制があり、先ほど紹介した巣箱作りもLPOの専門家が巣箱の作り方を教えに来てくれました。私たちは動物の専門家ではありませんから、こちらはアイディアを出して、このような専門機関が協力して実施する、そういう協力関係が常にあります。

ですから、このアジェンダ21のプログラムは、行政だけがやるわけではなく、他のアソシエーションやオーガニゼーション、そして学校など、いろいろなところと協力して作っていくことが大事なのです。そうしないと実際に活動できないので、連携関係を広く持つことが大切です。

# 5) 市民向けESDプログラム(経済):企業団地と地域企業ECODIS社の見学

2013年9月4日(18:00 - 20:30) にサンノルフ市が主催した市民向けESDプログラム(経済) に参加して、企業団地と団地内のECODIS社を見学した(図4). 企業団地の解説はLawrence Le Ray氏が、企業の解説はECODIS社の担当者が行った。内容からESDに関する部分を抜粋した.

サンノルフ郊外のParc d'activitiés de Kerboulard (ケルブラール企業団地)は、地域の雇用の創出と定住者の増加を目的として作られた。入居企業には、緑化の義務や建築規制、掲示する看板のサイズに至るまで、環境に配慮した細かなルールが定められ、使用するエネルギーの由来をMairieに報告する義務も課せられている。団地内には、道路補修や散水を担う市の施設があり、失業者対策として仕事の提供を行っている。

ECODIS社は自然素材の製品の生産・流通を主な業務とする企業で、地域経済の活性化と、それを通したグローバルな貢献を理念に掲げ、フランス全土に向け



図4. 見学した企業ECODIS社



図5. 有害物質を使用しないECODIS社の建物内



図6. 古い建物が並ぶマレトロア市街



図7. Magali Colineaux氏(右)と受付のMarie-Blanche氏(左)

た流通を、徐々にブルターニュ地域圏で循環する流通へと転換させている一方で、アフリカのマダガスカルやベナンでは、現地の特産品の生産・流通を通し、現地の雇用創出と自立のためのプロジェクトに取り組んでいる(図5).

# 2 Médiathèque de Malestroit (メディアテック)

5-7 Rue Sainte Anne 56140 Malestroit

Malestroitはモルビアン県東部に位置する人口2500人程度の小さなコミューンである(図 6). 2013年9月6日に、Espace Culturel Malestroitのなかにある Médiathèque(図 7)を訪問し、アニマトゥールのMagali Colineaux(マガリー・コリノー氏)にインタビューを行った。インタビューの内容は下記のとおりである。ESDに関係する重要な要素となる部分には著者が下線を付けて示す。

#### 1) 学校との連携プログラムについて

私が子どもたちのために学校に行くのでなく、毎週 火曜日に子どもたちがここに来ます。ここでは、子ど もたちが本を読むのではなく、私が読んだり何かを説 明したり、逆に私が子どもたちの話を聞いたりして、 子どもたちの感性を活性化する活動(アニマシオン)を します。アニマシオンでは、クラスを二つのグループ に分け、学校の先生が一方のグループに決められた テーマに関するストーリーを30分間話します. 同時に 私は、もう一方のグループに30分間同じテーマのイマ ジネーションを行います. その後グループを入れ替え て、30分間同じことを繰り返しますので、一つのクラ スに 1 時間かけることになります. 9才から11才の 小学生は毎週火曜日にここでアニマシオンをしますの で、たとえば、火曜日に4つのクラスが来ると、アニ マシオンを1日に4時間やることになります. そして, それぞれのクラスは、年間に合計6回ここに来ること になっています.

### 2) ESD環境教育プログラムのテーマ,内容について

テーマと内容は、各学期が始まる前に学校の先生と 話し合いをし、それぞれの学期のテーマを決めます。 話し合いのときには、こちらからテーマを4つほど提 案します。その後、話し合いで2つにしぼり、最後は 学校がテーマを決めます。学校で年間テーマを決め、 それに添ったアニマシオンを提案する場合もありま す。その際、こちらからは、学校の年間テーマとは全 く別の独自のものを提案します。

たとえば8才から10才のクラスでは、学校の先生が決めたテーマがサイエンスフィクション(科学)でしたので、科学に関する本の紹介、作家の紹介、本に出てくるボキャブラリー(言葉)の三つのアニマシオンをやりました。ときには、フィルムを使って見せたり、そのフィルムのなかで使われている音楽について扱うこともあります。

アニマシオンでやることは、<u>学習テーマに入りやす</u> <u>くすること</u>です. たとえばサイエンスフィクションで も、学校ではもっと教育的な内容になるので、ここでは勉強でなく、子どもたちにイメージを持たせ、テーマに入りやすくし、もっと楽しくします。私は先生ではありません。先生じゃないから怒ったりもしないし、もっと楽しく自由にやります。

10月から1月までの計画では、マレトロワの病院に併設された老人ホームに入院しているアルツハイマーの病気を持った人たちと、学校の11才くらいクラスの子たちをここに呼び、アルツハイマーに関する理解を深めるアニマシオンを行います。計画では、私がアルツハイマーがどんな病気かを紐解き、それから本を紹介するアニマシオンを担当します。同時にアートやエキジビションをオーガナイズしている担当が、アルツハイマーの人たちと子どもたちが一緒に絵を描く、というアトリエをします。このとき、クラスの半分が入れ替わりながら、それぞれを体験するという計画です。このアニマシオンは病院との協同で行い、描いた作品や工作は病院とここの両方で展示します。

### 3)「自然」「環境」に関するテーマについて

「水」についてはいろいろやりました。大きなマット(敷物)があるのですが、そこに魚や貝、海藻、海や川の生き物たちなど、いろいろな個々のイメージの象徴が施されています(図8).アニマシオンでは、海や川など、いろいろな「水」がある話をするし、それらの関係性についても話します。さらに、公害や汚染について話し、本を紹介したりもします。一方では、先生が水について「お勉強」的なことをします。



図8. 「水」のアニマシオンで使うマット



図9. フランス語でも「Kamishibai」

この絵本は「水」ではないけれど、地球を守る、とか、地球というのは「宝」なのだから、繊細な壊れやすいものなのだから、ちゃんと見なくてはいけない、守らなくてはならないというメッセージを伝えています。私はこういう本などを使って、話したり読んだりすることで、イメージを持つことを助け、先生のほうではもっとリアルなものを提供します。

また、この本は「地球の砂漠」で、水が足りない、 ということを描いている物語です。地球がどんどん砂 漠化していくことが物語のなかで描かれています。自 然・環境については、このようなテーマを扱います。

アニマシオンでは、「Kamishibai(紙芝居)」を使って紹介することもあり(図9)、たとえば、「水の循環」というテーマのときに使います。図書館は学校ではないから、「遊び」に近い、もっと面白いことをやるのです。子どもたちは、ここでの活動後に学校で数週間、そのテーマについてもう一度勉強することになります。

私は、すごくこの仕事が好きですし、<u>いろんなやり</u> 方があって、また違った相手に向けて方法を考えたり することもすごく面白いです.

来週,3才までの小さい子たち対象のプログラムがあります。子どもたちは9月にこのクラスに入って来たばかりでしょう。夏のバカンスで海に行ったりしているから、この時期に海の話をします。この新しい子



図10. 絵本を組み合わせた活動



図11. Arno Le Mouël氏

どもたちを「ベベ・ブッキン」と呼ぶのですが、子どもたちそれぞれにその小さな人形を持たせます。その人形で、この夏に自分がどういうふうに過ごしたかを、それぞれの子たちに先程のマットの上で演じ、話させるのです。そうして、人形がマットの上を進んで行ったところに本が置いてあり(図10)、その本とともにテーマに添った短い歌を歌います。今度の金曜日にこのアニマシオンをおこないますが、これは月に一回の金曜日の3才以下の子に対するプログラムです。

このパッチワークの敷物は私たちのものではなく、他のところから借りているのですが、マレトロワにはパッチワークを作るグループがあるので、ここのオリジナルの敷物を、こんどの冬の間に新しく作ることを、グループの老人の方たちに依頼しています。8才とか10才の大きい子たち用には、敷物がもっと大きくなったり、話ももっと長くなったりします。

### 3 Maison de la Chauve-souris

1 place de l'église 56540 KERNASCLEDEN

Kernascleden (ケルナスクレダン) はモルビアン県の西部に位置する,人口400名ほどの小さなコミューンである.町の中央には古い教会があり,隣接した建物ではコウモリ博物館 (Maison de la Chauve-souris) が民間団体によって設立・運営されている.本研究では,地域の自然環境を活用したESD環境教育の推進拠点として,この博物館を2013年9月5日に訪問し,代表のArno Le Mouël氏に2時間ほどインタビューを行った(図11).

### 1) AMIKIROについて(組織)

ブルターニュ・ヴィヴォン(セネで訪問した,自然保護区の土地を最初に購入した団体)というアソシエーションが結成され,10人位からスタートしたのは1950~53年くらいのことで、それは第二次世界大戦が終わってから8年くらいのことでした。そういうアソシエーションができたのはブルターニュが最初で、ブレストからはじまりました。その後、ブルターニュのいろいろな地域にこの名前のアソシエーションができ、いまは3000人ほどのメンバーがいます。

私たちAMIKIROは、そのアソシエーションの一つで、2003年から活動を始め、この「コウモリの館」を2006年にオープンしました。2007年からいままでの訪問者は6万人くらいですが、ここを始めたころは訪問者は全くゼロでしたので、少しずつ来訪者が増え、今ではある程度収入があり、7、8人を雇うことができています。

そこの教会の屋根裏にはコウモリの大きなコロニーがあります。その中に今、24時間コウモリの様子を見れるようにカメラを設置しています。コウモリの生活環境を乱さずに観察できるので、科学的な面からも子どもたちへの教育の面からも、カメラはよいマテリアルになっています。それは、このコウモリ館を訪れるツーリズムだけでなく、町全体にいい影響を与えています。わざわざここを見に訪れるわけですから、経済

効果やサイエンティフィックにも効果があるのです. 我々が最初に設置したカメラは、国の補助もあり、現 在、全国の教会や城など36箇所に拡大し、各地のコウ モリの様子をインターネットを通して見ることができ るようになりました.ただ、博物館があるのはここだ けで、さらに、ここから300m離れたところには、もっ と科学的、生物学的にコウモリを研究する研究施設を 作りました.私はコウモリなど翼手類の専門家です が、研究所ではコウモリだけではなく、昆虫や植物な ど様々なナチュラリストや研究者が集まれるようなシ ステムになっています.

# 2)子どもたち向けのプログラム、学校と連携したプログラムについて(教育)

子どものプログラムは、3才くらいから幼稚園、そして高校生くらいまで対象にしていて、当然子どもの年齢によって異なります。しかし、展示はともかく、外に出て自然の中を歩き、実際に自然に触れることを必ず入れています。室内で活動をする時もしない時もあるのですが、外でのアクティヴィティは必ずやっています。

ここに親子で来る場合もありますし、学校やサントル・ロワジールで来ることもあります。学校の場合、こういうことをやりたいと内容を指定してくる場合には、学校と事前にいろいろ相談をします。半日、一日中、3日、5日、それから継続してやる場合もあります。ここはコウモリがメインですが、別の動植物についてもアレンジできるので、これは要望によって対応しています。

最初に、アクティヴィティの内容を<u>学校と相談して</u> 実施します。その後、<u>ここで経験したことを学校に持</u> ち帰り、<u>学校がその内容を授業に取り込んでいき</u>、学 期によっては連続(継続)してやることもあります。た とえば生物学的なことなども、学年によって全然勉強 の内容が違うと思いますが、ここでは生態に関するい くつかのテーマを与えるわけです。それを学校に帰っ てから、学校が実際の学習の中に取り入れていく、と いった連携をしています。

取り扱う内容に国の基準や指示があるわけではない のですが、<u>学校では学年ごとの履修内容を国が定めて</u> いるので、それに合わせてプログラムを組むことにな ります.この中には演劇も入るし、他にもいろいろなことが入りますが、内容は先生にもよるし、学校の姿勢にもよります.

### 3) ESDについて(教育)

フランスのEEDDですね。ESDというのはインターナショナルな言い方です。フランスでは、ESDというよりも、フランス独自のものにずっと取り組んでいて、このEEDDの中にそのほとんどその全てが入っています。それに、それはすでに継続的に学校のほうで取り入れています。たとえばそのために一週間どこかに行ってなにか学ぶとか、なにしろ「子どもたちは外へ」という考えに基づき、外に出て学ぶことを推進する教育があります。この資料はブルターニュ地域のものです。もちろんこれと同様なものは国にもありますが、これはブルターニュ独自のものです。

ブルターニュでは、1950年代からそういう取り組みは少しずつ始まっていて、今に始まったことではありません。そこから60年くらい年月が経つ中で、だんだんとオーガナイズされてきたのです。ですからセオリー(理論)は、ブルターニュ・ヴィヴォンと同時期にこういう運動があちこちで始まったのです。それから学校が変わって、それから国が変えていくというようなこともあったようですが、とにかくそのへんは複雑でゴチャゴチャしていますね。ブルターニュでは、ここ20年ほど、学校の先生たちなどもいろいろ関わって、今、いろいろな取り組みをやって来ています。

やはり、自然の中に出て学ぶ、ということがいちばんポイントになっているのです。それはただ、「外で自然に触れる」ということではなくて、哲学的な部分において人間を形成するという意味でも非常に大事な行動であり運動であるということで、「外へ出て学ぶ」ことになっているのです。決して「外で勉強する」ことではないのです。

ここに年表があります(図12). そういうEEDDの教育のこともここにあります. ヨーロッパ全体, スウェーデンで取り組みが始まって、それがフランスに入って来てからの流れなどが載っています. 国がちゃんと認めて学校がESDの考え方を取り入れ始めたのは1983年ですね. だから30年経っています. そしてブルターニュが、ええと、国から決まったことが下りて来るわけな

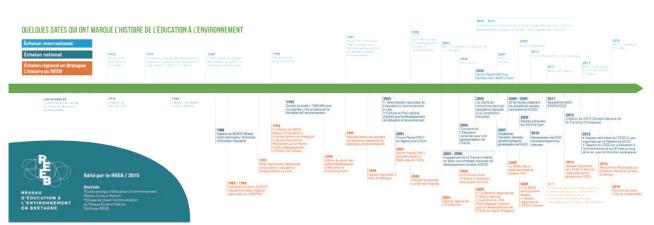


図12. ブルターニュ ESDの歴史年表

んですけれども、1992年ですね、50年代なんて、別に言わなくても子どもは外でしか遊ぶことができなかったので、子どもたちにとって、自然を守ることは別として、自然のことなんて別に言われるほどのものではなかったのです。でも80年代を過ぎ、特に今はコンピューターなどのテクノロジーがあって、子どもたちはずっと家の中にいてばかりというようになっています。だからよけいに「外に出ろ、出ろ」と言うことが必要になっています。

テクノロジーはいずれ変わっていくし、どうなっていくかはわかりませんが、自然や自然の中の動物たちというのは、クリエイト(創造)されたこと自体が、すべて<u>リスペクト</u>のうえに成り立っているものです。そういうことのほうが永久に変わらないもので、自然のことを学ぶほうが本来必要です。

### 4) 地域の自然の活用(自然と経済)

このsalle(部屋)では、一ヶ月に一度エクスポジション(展示)があって、いまはあるアーティストの作品が展示されています.このアーティストは自然のものを使ってこれらの絵を描いています.甘い良い匂いがするでしょう.これは、ミツバチのロウです.この作家は、キャンバスなども麻などの自然素材を使っています.ここでは、自然をテーマにした写真を展示することもあれば、自然素材を使ったアーティストの作品、教育的な内容を伝える展示などもしています.ここで使っている建築材料などは、熱帯雨林の木ではなく、すべて地域産の素材です.「リスペクト・グローバル」といって全体をリスペクトしても、それは大きな部分での話であって、結局小さい地域を駄目にしていってしまうやり方・考え方でしかありませんから.

私の仕事は研究ではなく、この博物館の運営です。 国との関係とか科学者との関係や、ここにやってくる ツーリストのことなど、私がこの博物館の責任者とし て様々なテーマを考えたり、オーガナイズしたり、会 議をしたりと、とても忙しいのです。さらに、今日の 朝6時までコウモリを捕まえて足に環をつけたる調査 をしていました。その調査は、自分の仕事ではなくて ボランティアでやっているわけです。

### 5) ケルナスクレダンの教会(歴史)

この教会はすでにブルターニュの補助を受けて修復されており、フランスにも7カ所しかないダンス・マカーブル(「死者のダンス」)の壁画を持っています.これは1450年頃のものです.

王がいて、ここに兵隊が、そして「死」が踊っている。 王様でも兵隊でも、死ねばみんな同じ、ということを言っています。罪人がこれですね(罪人は地獄で釜茹でされている)。そしてここ、悪魔みたいなこれの鼻などは、コウモリの一種のものです。ということは、多分15世紀くらいにはすでにここにコウモリはいたのです。この絵はコウモリの悪魔と怪物、向こうは鳥とエンジェルというように対照的に描かれています。イメージとして中世には、コウモリはドラキュラとか、なにか悪いイメージを持たれており、ここに悪魔の形として描かれたのです。 入り口にある石の水鉢は相当古いもので、この教会ができるよりもずっと前、紀元200年くらいのものです。キリスト教の時代よりも前、その頃ブルターニュは森ばかりでした。ケルトの時代、ドルイド僧がいた時代です。ドルイドはナチュラリストで、樫の木を大切にしていました。

この教会にはフランスでも一番大きな種類のコウモリがいて、あの鐘楼から800頭くらいのコウモリが出たり入ったりするんです。それで、ここから30km圏内を地域で保護しています。国立公園ではないのですが、それで森が残っているのです。コウモリは子どもを育てている間はそう遠くへは行かないので、3km圏内でだいたい虫などの餌が捕れるように、森を残して環境を保全しています。普通はあちこちにいるのですけれども、子どもを育てるときには結構まとまって暮らしています。

### 6) コウモリ研究所について(自然科学)

ここは、フランスで最初のコウモリ研究所です(図 13). 研究所では, 学生から大学院の博士号をとる院生, 研究者がコウモリの研究をするだけでなく、研修など もやります. また, 子ども向けのアクティヴィティに 使うホールもあり、勉強したり体験したりすることが できます.さらに、病気や怪我をしたコウモリを保護 もしており、そのためのシェルターを建築中です。研 究所では、月に一回は自然に関するアニマシオン(活 動)をしますが、テーマはコウモリだけではなく、鳥 や虫などいろいろな生き物を扱います。現在、オラン ダの研究者と一緒に取り組んでいる「6gしかないよ うな生き物が、なぜ40年も生きられるのかしという研 究や、コウモリが哺乳類だということは忘れられてい る研究、飛行機の構造にコウモリの身体の造りが生か されていたりと、コウモリは科学的に興味深い研究対 象なのです.

この研究所の運営費用は、博物館の入場料収入ではなく、基本的には町が負担しています。なぜなら、コウモリ博物館を見るために人が来るので、経済的効果もあり、そこから税金もとれるからです。また、土地や建物についても町の協力がありますし、研究所で使う資材などはAMIKIROが提供しています。他にもいろいろなサポートがありますが、これらがメインです。



図13. フランス初のコウモリ研究所

研究費については、行政にも町の人にとっても何の利益もないわけなので、私たち研究者個人の問題になります。ですから資金は、自分たちのお金なり、どこか企業などに協賛を求めて協力を得るような形にしなければ見つけられません。昨日から今朝のコウモリの識別調査も、博物館の仕事ではないので、どこからも援助が出ず、移動のためのガソリン代をはじめ、すべてが私のボランティアです。研究者はみんな研究費に困っているというのが現実です。

AMIKIROはこのセンターの建物と博物館「コウモリの館」に関わっています。設立の経緯は、ずっと以前に仲間と一緒に飲みながら話が盛り上がり、それから1年半くらいかけて準備をし、国やその他の援助はいっさい受けずに自分たちの費用でやりました。というのも、フランスは援助に必要なパピエ(書類)等がとても複雑で、書類になにが書いてあるのかさえわからないくらい大変なのです。それで、石のひとつから自分たちで調達して作ったということです。飲みながら「始めよう」といったのが2003年で、それから3年後に博物館を作って2007年にオープンして、ここまで続いています。

### 7) コウモリ博物館にて(観光と経済, 自然)

ここでは、コウモリのことを全く知らない人が来ても、できるだけわかりやすいように展示・解説をしています。世界中のいろいろなコウモリが説明されています。このモニターには、教会内のコウモリの様子がリアルタイムで映し出されています。コウモリは何も食べずに5ヶ月もこうやってぶら下がっていられます。これは力の要らないメカニズムです。このコウモリは2匹の子どもがいますがこのようにしてぶら下がっている。このコロニーには母親の雌コウモリと、2才までの若い雌と雄のコウモリしかいません。雄はこのコニーではなく、自分のテリトリーの中にいます。

これはすごく小さい種類のコウモリですが、追跡するのはとても大変です。コウモリはまっすぐ飛んでいくけれど、私たちは道路を車で行くのでまっすぐには行けないわけですから、網で捕獲して足輪をつけるのも、コウモリは飛ぶのが速いし何kmも飛ぶので、捕獲するためには1チームが森の中に先回りをしなければなりません。

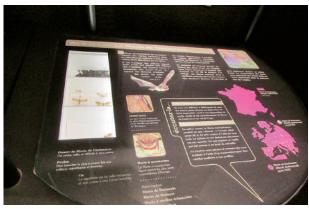


図14. 美しい展示パネル

私はコウモリの専門家で、あなたはシカの専門家として理解していますが、私も子どもの環境教育プログラムには哲学がないとだめだと考えています。私自身はコウモリの生態研究と保護に力を入れているけれど、博物館としては環境教育のこともきちんと考えています

### 8) 子どもたちへの働きかけ方は(教育)

子どもたちが来た時は、この展示スペースには<u>そんなにたくさんの時間は使いませんし、説明もしません</u>.これがコウモリなんだとは言わない。それよりも、こういう生き物がいるということをまず知って、だから守らなければいけないという気持ちになることのほうが重要だから、このパネルもいちいち読まないし、読ませることもしません(図14)。そのことが重要だとは思っていないのです。

<u>コウモリはこういうものだというのでなくて、もっと子どもたちを遊ばせる</u>のです。小学校の子どもたちの終日プログラムの場合、主に遊びのなかで学びます。たとえば、3人くらいの目隠しされた子を真ん中にしてあとの子はその周りを囲みます。周りの子たちは餌になるチョウなどの役で、3人の目隠しされた子どもはコウモリ役です。コウモリはディディ、とかドゥドゥ、とかいう声を出して、チョウから戻って来るエコーを聞いて、居場所をあてるといった遊びです。これはコウモリのエコロケーションを理解するのにすごく効果があります。

高校生になるともっと専門的になります. バットディテクター (探知機)の組み立てなど, 科学的でテクニカルなことに時間をかけて取り組みます. 自作したディテクターを持って実際にコウモリ調査に行く活動をすると, 自分で作った探知機でコウモリの動きを捉えた音が聞こえたりすると, それはもう大喜びです. コウモリが無数にいたりすると, それだけで子どもた

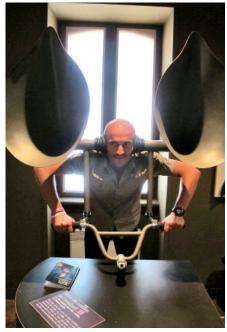


図15. 遊びながらコウモリを理解する仕掛け

ちは驚き、感激します.

私は、子どもたちがもっと積極的にアプローチできるようなことを考えています。「じゃあ、コウモリは何匹くらいの子どもを産みますか?」「こうもりはどうですか?こうですか?」などの質問をしても、そんなことには子どもたちはなんの興味もないし、実感もわかないわけです。そんなものは必要なくて、もっと楽しくて、子どもたちから何かが出て来るような、そういったものを工夫しています。

博物館に来て、展示だけ見ても、ただもう、見るだけで終わるわけだから、それでは全然意味がありません。大人がここを見ても、だいたい2つくらいしかコウモリの種類の名前を覚えられないのに、子どもたちはアクティヴィティを通して10種類くらい名前を覚えます。しかも、それはこの博物館の中ではなく、外のアクティビティによってです。

たとえば、学名や種名を書いたカードを使い、ゲーム的な要素を入れると、こどもたちにとってはすごく楽しいことになります。そうすると、6才くらいの子が、「シゾン」という小さいコウモリの名前を言えますし、私に「ムッシュー、この地域にもシゾンが住んでるの?」などと質問して来たりします。ですから、ただ、「コウモリ」というのではなくて、学名や種名で呼ぶ。それが教育です。ただ、大真面目にやるだけではなくて、もっと楽しいことをやりながら学んでいくということです(図15)。でも、大人はこうはいきませんが。

### 考察

本項では、ESDを担うフランスの3つの組織について、①ESDに対する意識・考え方、②ESD環境教育の推進体制、③内容と進め方、④学校との連携、に関するインタビュー調査の結果を比較検討することで、学校教育の中でESDを推進する上で必要な要素を抽出していく。

### ①ESDに関する意識・考え方について

Anne-Laere Caudal氏が「ESDをするのでなく、そう いうふうにしているつもりです」と表現するように、 ESDという錦の御旗を掲げるのでなく、やるべき事が あるだけ、という非常にシンプルな考え方であること がわかる. 同様にコウモリ博物館のArno Le Mouël氏 もブルターニュのESDの歴史を振り返るなかで「ESD の理論や哲学は自然保護が始まった1950年代からすで にあったもので新しいものでない」と述べ、ESDはこ こ20年ほどの取り組みに過ぎないと言っている。また、 Magali Colineaux氏も、ESDをとくに意識することな く、自然環境や福祉のアニマシオンを通してESDと同 等の教育を行っていた. 3人の話に共通しているのは、 やるべきことを明確にして淡々と実行するだけ、とい う潔い態度である. サンノルフでは, アジェンダ21ロー カルの制定により、これまで個別に取り組んできた自 然保護、経済政策、社会福祉の三つの施策を関連づけ て行いやすくなり、住民への理解が得やすくなったと

いう. つまり、本来やるべきことを効率的に進めるために、アジェンダ21やESDの名称を利用しているという見方ができる.

一方、日本では、ともすれば表面的な「ESDをすること」に意識が行き過ぎ、ESDが持つ理念や哲学の具現化から逆に遠ざかっているようにも思える。その典型的な表出が、DESDのユネスコスクール激増の件だと言える。

### ②ESD環境教育の実施体制

サンノルフでは、行政が自然保護、経済、社会福祉に関わる組織や個人を、アジェンダ21やESDで東ね、関係づける役割を果たしていることがわかる。一方、協力機関となる博物館や図書館、各種団体や個人は、行政や学校等と対話を通して積極的にアイディアを出し合い、プログラムを構築していく体制があることがわかる。

一方、日本では、形式的なESDの推進体制は確立されているが、例えば文化財行政、教育行政、農林行政、経済行政など行政機関の中だけでも関係性が薄い場合が多く、学校が授業の一環として行うESDプログラムを外部機関に丸投げする場合も見られることから、「対話による構築」という意識に乏しく、そのことがESDの理念・哲学を骨抜きにしているとも考えられる。

#### ③内容と進め方

サンノルフの場合は、行政の特性として自然、経済、 社会の3つのテーマを絡めてバランスよく進めている ことがわかる. エコロジストが中心となって設立・運 営しているコウモリ博物館は、経済や教育と絡めるこ とで、自然保護を具現化していると言える. 図書館で は、3つのテーマを関連づけて取り扱うものの、何か を強調して教えるのでなく、絵本や活動を通してイ メージを膨らませる役割に終始していることがわか る. コウモリ博物館では掲示を説明することもなく, 遊びや体験を通して感じ、考えさせるようにプログラ ムを実施していた.いずれの機関も、「こうだ」とい う決定事項を教えるような押し付けがましいものでな く、活動や対話を通して感じ、知ることで、対象者自 らが気づくような働きかけを工夫しており、指導者側 の学び方・教え方に対する探究がそこにみられること が印象的であった.

### ④学校との連携

メディアテックとコウモリ博物館のいずれも、学校と連携したプログラムでは、事前に目的や方法を綿密に打ち合わせることで、学校と一緒にプランを練りあげること、それぞれの役割が明確にされていることが共通していた。博物館は体験を通した専門的な知識の提供を、図書館は体験を通したイメージ形成を役割とし、それらを束ねて教育的効果を考えるのは学校・行政であるが、そこに対話と対話に基づく決定があることがわかる。

# まとめ

サンノルフの企業団地は, 行政によって自然環境, 経済、福祉のすべてが、バランス良く具現化され、目 的と施策、結果には、整合性・一貫性がみられる、全 国から地域へと販売エリアを収束させるECODIS社の 企業戦略も、グローバル化の時代に逆行する印象を与 えるが、地域経済の活性化という目的との整合性が高 い. 教育においても, 今回調査した3つの機関のいず れも,教育の目的と役割を明確にし共有するために, 関係者と「対話 | を重ねプログラムを作り上げていた. 同様に、フランスの教育ファームと自然保護センター でも「対話」が重視されていて(遠藤, 2017), 「目的」 が明確で担当者間で共有されているから、役割が明確 になり、知識教授でなく体験を通して考えさせるため の「手立て」の考案と有効性の検討が可能になるとい える. Anne-Laere Caudal氏のいうアジェンダ制定の効 果は、目標・目的が明確で共有できることであり、だ から、住民が目的と手立ての整合性を評価でき、そこ に納得があるということだろう.

日本の学校教育に目を戻すと、教育課程の見直しに関する平成26年11月の文部科学大臣諮問の理由書にESDが取り上げられ(文部科学省,2014)、中教審の議論もESDがベースの一つになり(中央教育審議会,2016)、新・学習指導要領にも「持続可能な社会」や「社会に開かれた教育課程」「主体的・対話的で深い学び」など、目的や手法、内容にESDの要素が数多く含まれている(文部科学省,2017)ことからも、学校教育におけるESDは、本調査当時よりも格段に重要性が増している。一方で気をつけないと、DESDのユネスコスクール激増のように「ESDすること」が目的になってしまい、学習指導要領が目指す汎用的学力の育成につながらない可能性がある。

だからこそ、学校や教師が教育目的を明確にし、そのための手法を一致させることが必要である。学校が外部の協力機関や協力者と対話を重ねながら、教育の目的、内容と手法、役割分担、想定される結果を十分に検討し、プログラムを実行し、その結果から修正を加える、というプロセスは、新・学習指導要領が子どもたちに求める資質・能力のひとつである。子どもに教えるためには大人ができるようになれ、これが、新・学習指導要領が学校・教師、そしてすべての大人に向けた強力なメッセージなのであろう。

### 摘要

フランス, ブルターニュ地域圏の学校教育における ESDプログラムに関する資料収集のため, 2013年9月 に行政, 図書館と博物館にて現地調査を行った.調査の目的は, これらの機関が, どのようにESDを捉え, 何をどのように提供しているのかを明らかにすることである.調査の結果, いずれの機関も, 多様な関係者と対話を通して目的の明確化と共有を図り, 整合性のある手立てをとっていること. また, 対象となる子ど

もに対して、知識を伝えるのでなく子どもたちとの対話を重視して、教育目的を具現化していることが明らかになった.

### 謝辞

長時間に渡るインタービューやプログラムの体験の機会を快く与えてくださった、Anne-Laere Caudal氏、Gwenaëlle Cuedon氏、Marie-Lawrence Le Ray氏、Arno Le Mouël氏、Magali Colineaux氏に心より感謝する.本研究は、JSPS科研費24501116を受けて実施した.

# 引用文献

- 1) 中央教育審議会(2016)「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」<a href="http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm">(2019.11.1参照).</a>
- 2) 遠藤晃(2017) フランス・ブルターニュ地域圏におけるESD・環境教育(1): 教育ファーム・ブレナトゥールとセネ湿地自然保護センター. 南九州大学研報47A: 125-133.
- 3) 遠藤晃(2019)「新・学習指導要領具現化の方法 1: フランス・ブルターニュ地方におけるESD実践に学 ぶ」、南九州大学人間発達研究9:63-81.
- 4)「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省 庁連絡会議(2014)「国連持続可能な開発のための教 育の10年 ジャパンレポート ポイント」
- 5) 文部科学省(2014)「初等中等教育における教育 課程の基準等の在り方について(諮問)」<http:// www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/ toushin/1353440.htm> (2019.11.1参照).
- 6) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領」,東洋館 出版社
- 7) 手島利夫(2018) 學校発・ESDの学び, pp.191. 教育 出版